

中山道鵜沼宿の立体的検証 ～防衛機能と野道について～

各務原市 ○西村勝広
 (株)エイトン 国際会員 可児幸彦
 奥田建設 奥田昌男
 昭和コンクリート工業(株) 中根洋治
 立命館大学理工学部 国際会員 早川 清

1. はじめに

近代を迎えると、鉄道網の整備が進み五街道の宿場町は衰退した。さらに自動車社会が訪れると、五街道は国道となり拡幅され、都市部では過去の面影を大きく失った。幸いなことに、19世紀に制作された『中山道分間延絵図』という精度の高い絵図が存在することにより、当時の街道の様子を知ることができる。この絵図には街道沿線の全てが網羅され、建物のみならず地形や道路設備にいたるまでが描かれている。

しかし、絵図は2次元の平面図である。そこで、絵図に標高値を与えて断面図を起し、3次元的に観察することで、中山道という道路と地盤・自然地形との関わり方、施工方法などを考察する。また、実際に現地を踏査し、当時の道をイメージしながら道路の機能を考察する。

2. 鵜沼宿東見附付近の屈折箇所

『中山道分間延絵図』は、寛政12年(1800)に幕府の命令によって制作された『五街道其外分間見取延絵図』全91巻の一部で、10巻からなる。原本の縮尺は約1800分の1で、街道を管理する道中奉行の監修により沿線の様子を詳しく描く。中山道鵜沼宿についても、当然のことながら収録されている(図-1)。

宿場の両端には、その出入り口となる見附と呼ばれる場所があった。鵜沼宿の場合、『分間延絵図』では見附の位置が判然としないが、安政7年(1860)に制作された『鵜沼宿家並図』には東西2箇所の見附が表記されている。ここで、東側の見附に注目すると、その位置は赤坂神社南側の中山道が屈折する箇所であったことが確認できる。この箇所は絵図に見るよりも実際は強く鋭角に曲がっている。『分間延絵図』は、全体が

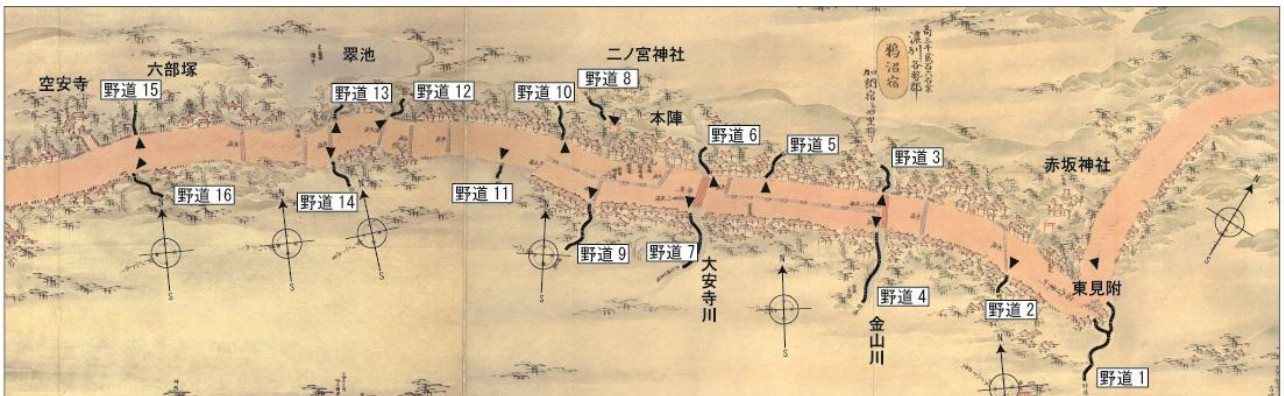


図-1 中山道分間延絵図の鵜沼宿付近 (▲は写真を撮った方向)¹⁾

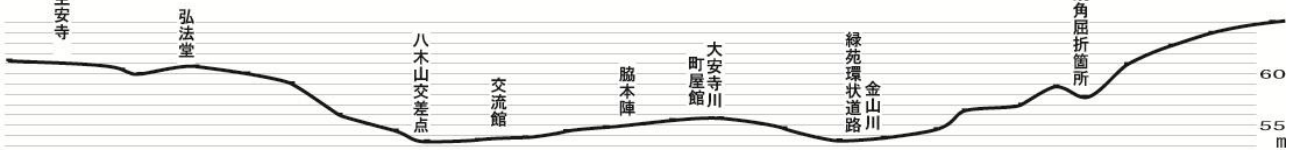


図-2 中山道鵜沼宿付近の断面図 (図-1 に対応させている)

Three-dimensional inspection of Nakasendo Unumajuku- A defense function and field path- : Katsuhiro Nishimura (Kakamigahara City), Yukihiro Kani (Eiton Co. Ltd. International Member), Masao Okuda (Okuda Construction Company), Youji Nakane (Showa Concrete Industries Co. Ltd.) Kiyoshi Hayakawa (Ritsumeikan University International Member)

巻本や折本の体裁であるため、中山道の進路をなるべく水平に描いていく必要があり、縦方向の急激な変化は圧縮してある。その断りとして記されているのが図中に示された複数の方位印で、各印の南北が一定していないことから、路線の形状は実測通りではなく所々に調整が加えられていることが理解される。

3. 屈折箇所 of 立体的検証

さて、もう一度、東見附付近における中山道の屈折箇所に注目してみる。鵜沼宿界隈の中山道は、河岸段丘として発達した崖の上に沿って路線がとられている。つまり、中山道は高位部を走っているため、赤坂神社の付近ではスムーズにカーブして北への登坂道と接続することができたはずである。それにも関わらず、鋭角に折り曲げたのには何らかの意図が感じられる。その理由は、この箇所の高低差に注目すると明らかになる。中山道を西から進んだ場合、金山川を越えた辺りから峠へ向かって登坂し始めるが、赤坂神社の前では路線を段丘の下段方向（南側）へ引いてから鋭角に折り曲げている。つまり、崖下へ道路を一旦、落とし込んでいることになる。

この屈折箇所は、明らかに人や物の移動に不都合を強いたであろう。過去に指摘がなかったわけではないが、この箇所は主要街道の要所に備えられた、いわゆる「鍵の手」や「杵形」に似た機能をもつ一種の防衛施設である可能性が高いと、改めて説明することができよう。有事の際には、東見附を閉鎖すると同時に、高低差で見通しを悪くした地点ならではの、様々な防衛作戦を講じることが出来たのではないかと思われる。実際に現場に立ち周辺を立体的に観察することで、新しい事実が見えてきた。

4. 中山道と自然地形

鵜沼宿付近の中山道は、上述の通り河岸段丘の崖上に沿い路線をとっているため、基本的には高台を東西方向に安定して走っている。しかし、北方の山々からの湧水は複数の小川となって段丘崖を垂直に切り低い南方へ流れ出ている。その流路には必ずと谷が形成されるので、中山道を進行するには複数の谷をまたぐ格好にならざるを得ない。

図-2は、図-1の区間の断面図である。そこからは、鵜沼宿周辺の中山道の高低差を読み取ることができる。緑苑環状道路と八木山交差点の部分は、谷底である。金山川などが自然に築いた緩いスロープを利用して、現在の道路が機能している。その点では、大安寺川は少し高い所を流れていることが特徴的と言えよう。鵜沼宿の東方は、うとう坂へ向かうので次第に標高が上がっていく。一方、西方へも登坂する。この西の急な高まりは、5万年前に堆積した木曾川泥流堆積物の影響によるものであると考えられる。²⁾

5. 野道の現況

絵図（図-1）をよく見ると、中山道沿いには多くの道が接続していることが分かる。それらは、野道と表記されている。野道は、その名称からしても、細くて街道のように機能しない印象が強い。

『中山道分間延絵図』に描かれた16本の野道を、図-1に示してみた。また、実際に現況の道路を歩き、それぞれの野道の確認調査を行った。

野道1（写真-1）は、中山道の鋭角屈折箇所から南へ派生する。写真では、右へ曲がるのが中山道、直進が野道となる。現在は野道の幅が広がっている。この屈折部は、上述の通り周りより明らかに低い。

野道2（写真-2）は、工事中の部分である。絵図では蛇行しているが、現在は直線である。重機の向う側は、段丘の下へ向かう坂道となる。

野道3（写真-3）は、緑苑団地の環状道路の一部となっていて、自動車が頻繁に行き来する。金山川が浸食した谷地形が利用されている。

野道4（写真-4）は、野道3の反対側に続く金山川沿いの道で、こちらも車道になっている。川には蓋がされ、暗渠になっており当時とは随分と様子が異なる。

野道5（写真-5）は、坂祝バイパスの建設により大きく様変わりし、現状で確認できない。

野道6（写真-6）は、大安寺川の左岸道路である。川に沿って道路も湾曲している。中山道を越えると、川の右岸を通ったことが絵図から分かる。

野道7（写真-7）は、絵図によると右岸であるが、現在は大安寺川の両岸に道路がある。

野道8（写真-8）は、二ノ宮神社の西方から境内へ繋がり、神社の参道階段を經由して中山道に接続する。当時は奥の土地が高く、起伏があったようである。

野道9（写真-9）は、武藤酒造と古民家の間の路地のような道である。今でも側溝が設けられていて、水の通り道になっている。

野道10（写真-10）は、道幅に当時の雰囲気が残る。坂を登り、二ノ宮神社の西側へ通じている。

野道11（写真-11）は、鶉沼西町交流館の正面に突き当たる道である。現在の側溝部分には、当時から水が流れていたようである。

野道12（写真-12）は、おそらく当時の姿のままであろう。一步入った斜面には、祠が祀られている。中山道との合流部に段差が生じているのは、車道側を後世に低く削っているからである。

野道13（写真-13）は、翠池の南から東岸へ通じる道である。絵図では池の南側に見えるが、それは池が鳥瞰風に描かれているからである。

野道14（写真-14）は、野道13の向い側の道である。道路を拡幅した時に勾配が強くなり、現在の階段になったと思われる。

野道15（写真-15）は、絵図ではそれほどでもないが、現況では強く蛇行して斜面を降りている。

野道16（写真-16）は、平坦な道である。最近の下水管理設工事の時に、道に沿って谷が埋没していることが分かっている。

6. 結論

今回、中山道鶉沼宿の断面図作成と現況踏査から、『中山道分間延絵図』に描かれた情報を、より引き出すことができた。平面的な絵図を、立体的な視点を重ねて見ることで、街道と地形との関わり方が鮮明になってくる。鶉沼宿においても、防衛のための道路設計が講じられていたことが明らかになってきた。

また、『中山道分間延絵図』に記された野道の位置について現況を確認したところ、野道5を除いては全て残されていることが分かり、その現存率の高さが確認できた。野道には特徴がある。絵図をよく見ると、野道に沿い水の流れが伴うことが多いと言える。金山川や大安寺川以外にも複数の小川が中山道を横断していて、野道はその水流によって形成された緩い傾斜を利用して段丘の上から下へ通じていたようである。先に見た緑苑環状道路も、元は谷筋の野道だったと思われる。当時の中山道建設工事では、大きな川には橋を架け、小さな谷川は埋め立て水路を整備して水流を整え、板で蓋をして暗渠にしている様子が絵図から伺える。また、一部では道路のセンターに水路を導き、防火水槽のようにして有効利用している。ここに、野道の存在が、中山道と自然や地形との関わり方を示唆してくれている。

しかるに、野道の大半は、いわゆる赤道として現存していた。後に車道（市道）として整備された道は僅かである。赤道とは、道路法が適用されず管理者のはっきりしない道路のことである。里道とも呼ばれ、昔から自然発生的に生まれた道で、村の人々の農作業や所用の行き交いに使われてきた道である。中山道鶉沼宿付近は、今も土地の筆割があまり変わっていない。同時に、野道も私有地化されることなく、ずっと長い間残ってきた。おそらく、中山道建設以前から通っていた古い道なのだろう。そういう意味でも、鶉沼宿付近には、古の雰囲気が、まだまだ多く残っているとと言える。



写真-1 野道



写真-2 野道



写真-3 野道 3



写真-4 野道 4



写真-5 野道 5



写真-6 野道 6



写真-7 野道 7



写真-8 野道 8



写真-9 野道 9



写真-10 野道 10



写真-11 野道 11



写真-12 野道 12



写真-13 野道 13



写真-14 野道 14



写真-15 野道 15



写真-16 野道 16

参考文献

- 1) 復刻版『中山道分間延絵図』第 16 巻 太田 鶴沼 東京国立博物館蔵 東京美術社刊行 1982 年。
- 2) 西村勝広・可児幸彦「御嶽山から 200km 鶴沼の木曾川泥流堆積物」『資料館だより』第 30 号 2012 年。